



艶肌女将と誘惑温泉

北條拓人

挿絵／岬ゆきひろ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

第一章	誘惑温泉へようこそ……………	4
第二章	美艷妻／菜々 一緒にお風呂に入りましょう……………	40
第三章	お姉さんメイド／まなみ エッチな注文かしこまりました……………	96
第四章	未亡人女将／穂香 子宮で受け止めてあげる……………	153
第五章	純嬢女子高生／里緒 私たちこうなる運命だったのね……………	212
第六章	竜の宮のおんなたち／終わらない夜伽話……………	263

登場人物

Characters

風早 穂香 (かざはや ほのか)

『温泉宿 松風』の女将を務めるお淑やかな和風美女。夫とは三年前に死別し、高校生の娘を持つ母親だが、とてもそうは見えない美貌とEカップのバストを持つ。

風早 まなみ (かざはや まなみ)

穂香の妹。松風の従業員でメイド服を着て接客する。面倒見が良く、裕也に仕事を教えたり悩みを聞いてあげたりする。時折、過度なスキンシップを取ることも。

風早 里緒 (かざはや りお)

穂香の一人娘。高校に通いながら松風を手伝う家族思いな少女。最悪な出会い方をした裕也に対しては、なかなか素直に接することができない。

沢村 菜々 (さわむら なな)

元・客室乗務員の人妻。表向きは湯治のため、松風に長逗留をしているが、実は夫の浮気に愛想を尽かし家出中。

田原 裕也 (たはら ゆうや)

会社が倒産してしまい、行き場を失った青年。明るく前向きな性格で、偶然流れ着いた松風で穂香に一目惚れし、そのまま従業員として働くことを即決する。

「そうですか？ これくらいの強さで？ おっぱいの芯、揺れてます？」

掌で下乳の丸みを包みこみ、五指の中で嬲るようにして、ふるふると振動させる。

「あつ、あつ、あああつ…揺れてるっ、おっぱいの芯が揺れてるっ。揺れちゃうっ!!」

ふるんふるんふるん、たふたふたぶ、ぶるぶるぶる。

交互に指先を乳肌につけ、掌の底で乳頭をくすぐりながら肉房振動を繰り返す。

皮下のスライムを重々しく波立たせるイメージで、ふるんふるん、ぶるんぶるん。

歯を食いしぼる菜々の張り詰めた巨乳は、裕也の与える振動の他に、女体そのもののわななきも加わり、震度七の巨大地震となつて崩落を迎えた。

「溶けるうううっ!! おっぱいが蕩け落ちちゃううっ…あ、イクっ! ……イクうううっ」

ガクンガクンと、糸が切れた操り人形のように菜々の女体が前に大きく傾いた。かと思うと、次の瞬間には、がばつと背筋をのけ反らせ、いかにも切なげに唇をわななさせるのだ。

（ほ、本当に、菜々さんが壊れちゃった。でも、なんて色っぽいんだ!）

キュッと締まって堅く皺を寄せる乳輪。薄茶色を妖しくぬめり輝かせ、未だゆんゆ

んと揺れている。

裕也は、魅惑の乳房を根元から揺さぶりながら、人差し指の先で乳頭を圧迫した。こうしていると今にも母汁が噴出しそうで、たまらない気持ちにさせられた。

「あああん、恥ずかしいわ。おっぱいで、イカされちゃうなんてっ」

少し拗ねたようにつぶやきながらも、しなやかな指が裕也の腰に巻きついたタオルを取り払った。ボロンと飛び出した肉茎が、やんわりと包みこまれる。

白魚のような上品な指と、醜いとさえ思える勃起の取り合わせは、あまりにも妖しく淫靡だ。

「え？ ううあつ、あのっ……菜々さん？」

熱っぽい眼差しで切なげなため息をつく菜々に、いやらしい手つきで男性器を弄られる。すっかり勃起したペニスを愛しげに撫でさすられるのだ。

「うふふ、今度は私が裕也くんを責めちゃう」

嬌然とした微笑みで、幹いっぱいの手淫運動が開始された。

4.

「すごく大きくて堅い……それに熱いわっ」

男根を柔らかく握りしめたまま、しなやかな女体が、前のめりに迫ってくる。

浴室タイルにへたり込んだ裕也の上に、滑り込むように肌をまわりつかせる菜々女体の素晴らしさを、極上の肌触りを、余すところなく堪能させてくれるつもりなのだ。

「な、菜々さん。そんなとこ、汚いですよ……」

白魚のような指先が、カリ首周辺をきゅきゅつと擦る。甘い電流に痺れ、一段と堅さを増した。

「うふふっ。今度は私がきれいにしてあげるう」

ツヤツヤの頬に、悪戯っぽい笑みを浮かべている。おんなの誇りと自信に満ちた菜々は、それまで以上に妖艶さを増し、美しく咲き誇っていた。

「任せてっ！ ちゃんと気持ちよくもしてあげるから」

男の生理を充分承知しながら、普段はおくびにも出さずにいる白い指が、裕也の股間を淫らに這う。

「うふっ、男の匂いがする……この匂いを嗅いでいると、私エッチになっちゃうの」

その言葉通り、性臭に触発された菜々の瞳は、とろんと潤んでいる。女体が緩やかな性感に浸されているのだろう。いつの間にか左手も淫らな悪戯に加わって、淫囊を

やわらかく揉みほぐされた。

「ああ、私は人妻なのに、こんないけないことをしている。そうさせているのは、裕也くんよ……。こんなにかわいい裕也くんだからしてあげたいのっ」

ふしだらなおんなである自覚が、いつそう菜々を大胆にさせているようだ。裕也のまるで少年のような反応が愛しいと言わんばかりに、手淫の熱心さを増していく。またしても竿部分に五指をまとりつかせ、二度三度と握っては開きを繰り返すのだ。

「あ、あうっ、うぐうっ」

菜々のほっそりとした指を、裕也は先走り汁で穢した。あまりに繊細で上品な指であつたため、亀頭汁で汚してしまうのは申し訳ない気持ちにさせられる。けれど、当の菜々は、そんなことにはお構いなしに、むしろ率先して透明な汁を指先にまぶし、そのヌルつきを利用しようとさえしていた。

「うおっ……」

思わず口を突く歓喜の声。それに満足するように菜々は、赤黒い傘から根元へと表皮を引っ張るようにしごきはじめた。余った皮で亀頭を覆うように、ずりゅっ、じゅりゅっと上下させるのだ。

「もう少し、刺激的な方がいいかしら……」

思いつきを菜々は、そのまま行動に移していく。豊かな乳肉に、勃起を挟むのだ。ふわふわのふくらみに包みこまれ、胸元に残るシャボンのヌルつきを擦りつけられていく。泡立てられたタオルが、床に落ちているのに見向きもせず、あえて乳房から移すことで、裕也を喜ばせようとしてくれるのだ。

「どう？ おっぱいに包まれた感想は……」

菜々の体温そのままに、ふんわりやわらかく包まれ、乳房の外側からむぎゅつとばかりに圧迫されると、胎内に埋め込んだのと変わらないほどの性感が、ゾクゾクゾクツと背筋を走る。

「最高です。菜々さんのおっぱい、ものすごく気持ちいいっ！」

裕也の答えににっこりと微笑んだ菜々は、さらなる快感を与えようと、自らの下乳を右腕で支え、肉竿に沿ってわっさわっさと揺さぶってくる。薄紅に色づく乳肌の下で、たっぷたっぷと熟脂肪が淫らに躍っていた。そのふるんふるん具合が、勃起肉を絶妙に刺激してくれるのだ。

ぐちゅっぐちゅっ、わっさわっさ、にゅ、りゅっ……ぐちゅ、にゅっるりゅうつ。

乳房と勃起が擦れる艶めかしい水音が、どんどん激しさを増していく。

「うううはぐわあっ……。そ、それ、いい！ おちんちん溶けちゃいそうです！」



パイズリにもこんなに様々なバリエーションがあることに、裕也は半ば感心しながら、背筋をびんびんと駆け上がる甘い電流を堪能した。

「あふん……ああ、裕也くんのが、おっぱいの中でびくんびくんって……ひうん、あはあ、そんなに暴れないでえ……」

あまりの快感に、肛門の筋肉をぎゅつと絞る。そのたびに、勃起肉にも力がこもり、ぎゅんぎゅんとはね上げる。それが菜々の乳肉を引き攢れさせ、振れさせるらしい。灼熱の肉塊からの力強い生命力にも煽られ、さらなる発情を促されているようだ。

「ああ、たまらなくなってきたやう。裕也くんのおちんちんがいけないのよ。このすけべな塊が、菜々をどんどん淫らにさせるの」

乳房を押しつける力が、さらに強まった。同時に、蠱惑的な肉体が、白蛇のようになくなると、裕也の太ももの上を這いずりまわる。

「はうううっ……。裕也くんに、気持ちよくなって欲しいのに……私がこんなに感じちゃうなんて……」

勃起にコリコリもちした感触が、ずりゆりゆりゆりと擦れていく。菜々の豊麗な肉体もびくつびくつと、痙攣したような引きつけを起こしている。巻き込まれた乳首とペニスとが、しこたまに擦れ、淫靡な電流に痺れているのだ。にもかかわら

ず、菜々は、かいがいしいパイズリを止めようとしなない。

「はほう……ふううん……あふううつ」

ひたすら悩ましい声をあげながら、お尻をもどかしげにもじもじさせている。ヴァギナから込みあげるやるせなさに、太ももと太ももを擦り合わせているのだ。

（うわあつ、きつと菜々さんのおま○こ、ぐしよぐしよなんだろうなあ……）

濃厚なフェロモンが、ぷーんとそこから漂ってくるようで、裕也を一段とやるせない気持ちにさせる。

「裕也くん。こんなことをする私をふしだらと思わないでね」

谷間から突き出した亀頭の先に、ちろりと朱舌が伸びた。まさか舐めてもらえるなどと思ってもみないところに、舌先が突き刺さる。

レロンぶちゆり、にゅちよつ……ぶもん、びちゆるつ、ぐりぐりぐり。

尿道口を掘り返すような舌の動き。かと思うと、今度は亀頭全体を、舌腹がべつとりと覆う。

「ぐうううつ。そ、そんなつ、菜々さん。そ、それすぎつ!!」

凄まじい快の電流に、ぐぐつとのけ反った拍子に、ごつんとタイルに頭をぶつけた。しかし、痛みは鋭い快感にかき消され、押し寄せる射精衝動しか感じられない。

再び括約筋をぎゅっと締め、肉塊をビクンツとはね上げた。そんな裕也の快感を、菜々は乳肌で察するのだろう。先走り汁のぬるぬるも相まって、滑りがよくなった肉幹を、肉房のスライドが襲う。放尿後のような震えが、ぶるぶるぶるぶると全身に起きた。それほど喜びに、よく射精をこらえることができた、我ながら思う。

少年のように昂る気持ちが、いつも以上に快感を高めている。菜々ほどの美人が、奉仕してくれているのだからそれも当然だった。

「ねえ、お願い。私のここ、きれいにして……まだこは、洗われていないわ……」
鼻にかかったような甘い声で囁く菜々は、百八十度体勢を入れ替え、裕也の上半身に跨がるようにして女豹のポーズを取った。

ぐいっとお尻を突き出してくるため、艶やかな下腹のこんもりと盛り上がった丘や、よく手入れされた逆三角形の茂みが露わだった。神秘のクレヴァスまでもが、今や遅しと待ちわびている。たわわな乳房に、お腹のあたりを心地よくくすぐられた。

「これが、菜々さんのおま○こなんですね……」

完熟の女陰は、溢れんばかりの蜜液にコーティングされ、鮮紅色がテラテラとヌメリ輝いている。チロリと舌を出したように、肉花びらがはみ出していた。果汁たつぷりに滴るザクロのようで生々しい。立ち昇る甘酸っぱい匂いには、チョコレート溶解

かしこんだような芳香が入り混じり、裕也の下半身をダイレクトに刺激した。

「ねえ、見ているだけで満足なの？」

おんなの神秘そのものを見せつけられ、茫然自失の裕也に、目元をぼうつと赤らめた美貌が振り返る。その妖しい表情は、「触れなば落ちん」といった淫らな熟女以外の何ものでもない。お尻が挑発的に、左右に振られた。臀朶がプルンと揺れ、おんな盛りの肉感を生々しく伝えている。

「な、菜々さん！」

淫靡な光景にたまらなくなつた裕也は、腋にむっちりとした太ももを挟みこみ、無防備な臀朶へと両手を伸ばした。触れられた尻がキュンと収縮し、側面にエクボを描き、深い谷間が一本の溝となる。

裕也は、亀のように首をグイッと伸ばし、菜々の股間に口腔を張りつかせた。

「ああんっ、そ、そんな。いきなりだなんてえ……」

しとどに濡れそぼつ淫裂に、いきなりクンニを受けるとは、思っていなかったらしい。あわてた菜々が腰を泳がせ、唇から逃れようとした。けれど、裕也は豊かな尻肉を両腕で抱え込んでいるため、張りついた淫裂から振り払われることはなかった。

「はん、あああうっ、ほおおおっ……ひうっ、ああ、そこっ」

「ゆ、裕也さん？」

抗いが途絶え、未亡人独特の凜とした気の張りまでもが緩んだ気がした。

「何を泣いているの……？」

ぼろぼろと零れおちる裕也の涙を、未亡人は贖罪と受け取ったのだろうか。

「いいのよ。もういいの。わたしも恥ずかしいところを見られて気が動転したみたい……。そうよね、タイミングが悪かったのね……。それに、決して裕也さんを避けるつもりはなかったのよ……」

まるで子供をあやすような口調に、よけいに涙が止まらなくなった。昂る感情をコントロールできないのだ。それでいて抱きしめる腕の力は、緩めようとしな。母にすぎる子供のような気分だった。

「ごめんなさい。ごめんなさい。好きです。穂香さんが好きです」

駄々っ子と受け取られても仕方のない告白。二十三にもなつてみっともないと思っても、どうにもならなかった。

「ああんっ、そんなにきつく抱きしめないで……。ねっ、判ったから……。もう、大人の大人がおかしいわよ……。ほら、涙を拭いてあげる。だから、少しだけ力を緩めて」やさしくなだめてくれる穂香。腕の力を緩め彼女の細腰に巻きつけると、帯の間に

忍ばせてあるハンカチを手に、少しでも背伸びをするようにして涙を拭ってくれた。

「ごめんなさい。裕也さん……。わたし、嫉妬したの……。あなたとまなみのその……。見てしまったの……。だから、やきもちを妬いて……。それを悟られたくなかったから、よそよそしい態度になったの」

ずるずるずるつと鼻を吸りあげる裕也に、穂香がやつと微笑んでくれた。

雪の結晶を集めたような漆黒の双眸が、きらきらと煌めき、彼女も泣きそうに潤ませていた。

穂香の言葉を、齟齬そごのないようゆっくりと咀嚼してから、真剣な眼差しで、その人形のように整った美貌をじつと見つめた。

切れ長の大きな瞳も、裕也を吸い込むように見つめ返してくる。けれど、刹那、恥じらいに耐えかねるように目を逸らした。それも、まるで触れなば落ちる風情なのだ。「穂香さん：それって、穂香さんも僕のことを好きでいてくれるってことですよね？」確かめずにいられずに、折れそうに細い腰に巻きつけた腕を、ぐいっと引き絞った。引き締まった腰が、穂香のやわらかなお腹のあたりにあたる。たまらず若牡のシンボルを、ズボンの中で破裂させんばかりに勃起させた。

「あんっ……。また、そんなに強くう……」

ごつごつと堅くて熱い感触を押し当てられ、気がつくとも穂香も微かにではあったが腰をくねらせていた。裕也に気づかれないように、そつとではあったが、和服の奥に隠した太ももを、淫靡なばかりにもじもじさせていた。

穂香自身、なぜここまで本心を晒してしまうのか判らない。まなみや里緒のことが引つかかっていたが、素直に気持ちをぶつけてくれる裕也にほだされたことは確かだ。「教えてください。穂香さんの気持ち……僕のことをどう思っているのですか？」

べったりとくっつけあった身体と身体。その距離以上に、おんなの境界線を侵されている気分だった。未亡人の貞操観念が、いけないと警告するものの、心も身体も曝け出したい気分になせられる。

「ねえ、裕也さん……いけないわっ……。私たち十歳以上年が離れているのよ……」
傷つきたくない自己防衛の現れ。年齢を言い訳にしても、溢れ出そうとする気持ちを抑えたいのだ。

「そんなこと関係ありません。穂香さんは、こんなに若々しいし、きれいだし、歳の差なんて……」

裕也の腕の力が、さらに強まった。邪魔な自尊心、凝り固まった倫理観、分別ぶっ

た貞淑さ、穂香を守る理論武装の全てを打ち壊そうとする力強さだった。

（男の人の腕の中で、窒息しそうな感覚を味わうのは、いつ以来かしら……）

あらぬ情念が燦りだし、堅持していた理性そのものが溶かされていく。その危うさに、ヒップの奥がじーんと甘美に痺れてしまう始末だ。

息苦しさに深く息を吸えば、鼻腔に青臭い苦みを帯びた青年期特有の男らしい体臭を感じてしまった。久しぶりに嗅いだ発情する男の匂いに、脳の芯がジーンと痺れた。（いけない！）

自らを戒めるのも虚しく、思わず失禁してしまいそうなほどお尻がわななき、じゅわじゅわじゅわと熱い蜜汁が奥から溢れ出した。ねつとりと太ももにまで滴り落ちる粘液が、ショーツをはいていないことを思い出させる。その危うい感覚も、穂香を冷静にはさせてくれない。そればかりか、つま先から膝までが切ないまでに甘く痺れ、腰が砕けそうにさえなっていた。

「お願いします。言ってください。僕のことを好きだと言ってください。僕はあなたを愛しています！」

耳元で呪文を囁かれると、穂香の女体が考えるよりも早く答えを出してしまった。ぞくぞくぞくつと震えだしたのだ。

（ああん。だめよ……。そんな甘い顔で囁かれたらわたし……）

ようやく震えが止まっても、腰が蕩けていた。瞳は焦点を失い、美貌はトロトロにさせ真つ赤に上気している。霧の中に佇むが如く全身をじつとりと濡らし、ツンと尖った頤で玉を結んだ雫が、華やかに赤く染まった首筋や胸元の白肌に流れ、完熟の牝フェロモンを凄絶な色気と共に発散させてしまうのだ。

「僕は、初めて会った時からずっと穂香さんを、こうしたかった……」

耳朶を舐められたかと思うほどの熱い囁き。

穂香は激しくうろたえた。亡き夫への裏切り、妹への裏切り、娘への裏切り。けれど、心の奥底に眠らせていた牝が、ここぞとばかりに蠢いて、「でも……、でも……」と、繰り返す。

「あっ！」

発情熱に立ちくらみ、くらくらつと女体が揺れた。距離ゼロの裕也にしなだれかかるように、太ももが一步前へ。わずかに乱れの残っていた裾がほつれ、偶然にも生脚の純白太ももで裕也の膝を挟みこんでしまった。

「あふんっ！」

ショーツをはいていない股間が、ジーンズ生地を擦れた。

「あうんっ、あ、はあっ、ああ、だめえっ…」

思わず吹き零した熱い吐息に、煽られた裕也が、素直になれと促すように振動を加えてくるのだ。

骨盤底に密着させた足が、トントントンと股間を襲う。自慰を試みたせいで、いつも以上に敏感になっていた女陰が、強烈な淫波を発信した。

「だめっ、そんなことしちゃいやっ…：…お、奥が、子宮が揺れちゃううっ」

たまらず穂香は、裕也の肩にしがみつき、脂汗が噴き出した美貌を、彼の分厚い胸板に埋め、切なく呻いた。

「ああん、裕也さん許してっ…：…わたし、おかしくなっ…てしま…いそう…：…」

そんな懇願も、若牡をさらに興奮させる効果しかないことを知り尽くしている。承知した上で、鼻にかかった甘い声を漏らすのだ。

案の定、「んんっ」と呻く着物の裾を、裕也がたくしあげはじめた。まるで乳房のようにまろやかな太ももを直接抱え込み、むっちりとした純白丸みを腰骨の上まで撫であげてくる。

「すごいです。穂香さんの太もも…：…なんて手触りなんでしょう…：…やわらかくて、すべすべで、こんなにむちむちパンパンなのに…：…指がすつと吸い込まれていくように

……。ああ、触っているだけで僕、イケそうです」

「あああつ……。ゆ、裕也さん……。だめっ、そんなに触っちゃだめっ……。ああ、そこっ、感じちゃう……。感じちゃうのお」

あさましく誘っていることを自覚しながらも、裕也の膝の上でお尻をモジつかせる穂香。肉花びらを振らせて、目覚めてしまった性感に身を任せている。

未亡人の貞操観念を微塵も残さず吹き飛ばす振動が、トントントンと再開された。

「つく……。あふうん……。ああ、それ、擦れるの……。あそこ、擦れて揺れちゃう……」

一つ振動を加えられるたび、高みに近づいていることを自覚した。切ないまでにやるせない快感が女体に押し寄せる。視界に虹色の光彩が浮かんでは消えていった。

「好きです……。穂香さん……。愛してます」

囁きながら穂香を追いつめる裕也。その真剣な表情は、決して穂香を弄んでいるわけではないことを如実に伝えていた。

（うれしいっ……。こんなに熱い思い……。一人のおんなどして応えたい……）

真摯なまでに気持ちぶつけてくる裕也に、穂香はそれを受け止める決心をした。

「わたしもよ、裕也さん……。そうよ。わたしも裕也さんを憎からず思っていた……。あなたのこと好き」

裕也が心から望んでいるはずの告白。胸に秘めたはずの思いを、ついに穂香は言葉にした。しかも、一たび口にしてしまうと、その思いが溢れんばかりに込みあげてくる。半ば信じられないといった表情ながら、裕也の腕の力がさらに強まった。窒息しそうなほど抱きすくめられ、頭の中で歓喜の花火が打ちあがった。

4.

裕也は幸福感に浸る傍らで、激しい渇きにも似た衝動を感じていた。狂おしいまでの性欲が込みあげてくるのだ。まさかとは思いつつも、あらぬ妄想が脳裏をよぎった。

（もしかしたら、させてもらえるかもしれない……）

らしくない劣情の源も、穂香の魅力に他ならない。

清楚な胡蝶蘭を想わせる上品に整った美貌が、せいろで蒸し上げられたようにしつとりと紅潮し、官能味溢れる唇も息苦しうにわなないて熱い吐息を漏らしていた。

やわらかな柳眉も悩ましく八の字を描き、深く寄せられた眉間の皺を妖しく飾る。ぽーつと白霧に煙らせた双眸を、泣き濡れるかのようにジュンジュンと潤ませて、目覚めさせてしまったおんなのサガを露わにしていた。

（穂香さん……ああ、穂香さん……なんてエロイ表情をするんだろう）

清廉貞淑であつたはずの女将の疊惑的すぎる発情姿に、見ていただけで射精してしまいそうなほど興奮させられるのだ。

ズボンのジッパーを弾き飛ばさんばかりに勃起した肉塊が、その先端鈴口から射精並みに濃い先走り汁をぴゅぴゅつぴゅつと噴き上げている。

たまらず裕也は、むっちり太ももにあてがつたその手を、さらに奥で揺れる肉朶に進ませた。自らの膝を骨盤底に密着させたまま、ぶりぶりの肉尻を揉みしだくのだ。

「あううつ、お、お尻っ……やん、んっ、ふあっ……やあ、だめっ、お尻、揉んじやダメえっ」

抗いの言葉にも、悩ましく媚が含まれている。いつもそうだった。意図的に秋波を送るまなみに対し、穂香は天然で悩殺してくるのだ。

裕^{あわせ}の色無地の着物に、京袋帯をしているため気がつきがたいが、その下にあるウエストは驚くほど細い。九十センチ越えのバストトップから三十センチも深くくびれさせている。そこから急激に張り出した艶腰は、出産を経験した女性らしい骨盤の広さに、やわらかむちむちの熟脂肪を悩ましくのせ、九十五センチの堂々たるボリュームを誇っている。横から見ると、ストンと落ちるはずの和服のフォルムでさえも、あまりの頂点の高さに突き出していることが判るほどの熟れに熟れきった巨尻なのだ。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のお愉快なBlogも更新中!



<http://www.comic-alkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!